

新しい免疫学 2

赤ちゃんの免疫学

日本免疫病治療研究会会長 医学博士 西原完成

今日、日本の子育ては世界中でも最悪の状態です。厚生労働省と小児科医と助産師さん、保健師さん、保母さんが完璧に壊れてしまっているからです。いよいよ薬局のくすりの先生に子育てを正していただきなければ、日本は亡んでしまいます。今すでに悲しい事件が新聞を毎日毎にぎわしています。冷血漢のような17歳の行動や、ままこいじめが高じて子殺しに及ぶ事件です。この両者は、ともにスポック博士の育児法の誤りによるもので、いまだにスポック方式を続けているのは先進国では日本やニュージーランドだけです。

昭和41年にスポック博士の育児法がわが国で翻訳され、これに基づいてインテリ層の親が子育てに失敗し、出来そないの子が育って戸塚ヨットスクールのお世話になりました。このころ生まれた子が育って30歳になって、今子殺しをしています。冷たいミルクで育つと冷血漢になります。冷たい物中毒の若い女性は、性欲が亢進して不用意に子を作り、すぐに別れてしまいます。やがて別の男を引き入れると、前の別れた男が憎くなってしまって、その子を2人でいじめるのです。

この誤ったスポックの育児法を昭和55年に厚生省が100%母子健康手帳に導入しました。その後からアトピー、小児喘息が急激に増えています。今から2年前に問題となった17歳は昭和57年生まれです。離乳食を5~6ヶ月早くして冷たいミルクでも良いとしたのが赤ちゃん

の受難の始まりです。ちょうどこの頃、アメリカでは乳児ボツリヌス症事件が発生し、調査した結果赤ちゃんの腸が子として完成する2歳半までは未完成でボツリヌス菌の芽胞やタンパク質を消化できずに吸収してしまうことが明らかになりました。

その結果、スポック博士は否定され追放されてしまいました。特に離乳食のタンパク質が毒(ポイズン)として徹底して排除されたのです。2歳半まで母乳中心で、おんぶとだっことはいはい、おしゃぶりとなめなめを徹底させているのが、今のアメリカ医学の正当な育児法です。これはちょうど戦前のわが国の育児法とほとんど同じです。元来子育ては科学ではなくて伝承です。猿人時代からの正しい伝承さえあれば、戦前の日本の育児法のように世界でも最も優れたものとなるのです。

それでは今日問題となっている乳児のアトピー性皮膚炎と食品アレルギー、食品アナフィラキシーの実例と治し方を記します。

第1症例

1歳の男児。5ヵ月から離乳食を与えたところ、8ヵ月頃から体中がアトピー性皮膚炎となり1歳で来院しました。離乳食のタンパク質は植物性、動物性を問わず抗原となり、抗体ができるとアトピー性皮膚炎になります。離乳食は毒だから乳児用のミルクに代えると、1週間で玉の肌になります。母親の手の荒れも1週間で治っていますが、これは冷たい物中毒で腸を冷やしてい

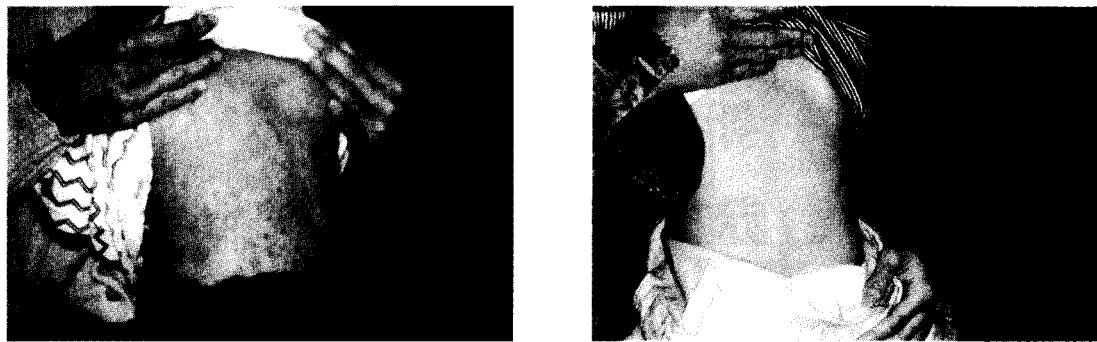


図1 アトピー性皮膚炎

たのを止めさせたために治ったのです（図1）。

妊娠中にアイスクリームをたびたび食べますと、生まれた子は母乳でもアトピー性皮膚炎がしばしば発症します。腸を冷やしてアトピーになるのは、腸扁桃でM細胞の小胞にとめどなく腸の常在菌が取り込まれ、これを小胞内の消化力を失った白血球が貪食し皮下組織まで運び、そこで細胞レベルの消化をしてその不消化産物のかゆみ物質を皮下組織に捨てるからです。じんま疹は悪いものを食べると、3分から5分で皮膚に現れます。

原始脊椎動物のサメの時代から、皮膚は白血球がばい菌やアミンを消化して排出する場なのです。アトピーの乳児には離乳食を止め、乳児用のミルクに戻し、でんぶんや純白米の重湯状の物をほんの少々に換えただけで1週間で玉の肌になります。

1歳未満の子にはタンパク質はポイズン（毒）だというアメリカ医学では常識のことも、残念ながらスボック博士の誤った育児法をかたくなに守っている日本の小児科医には、まったく知られていないのです。赤ちゃんによっては、1歳半でも2歳でもタンパク質によっては食品アトピーになります。2歳半までは母乳中心でいいのです。猿人から原人となって、それが人類に進化してきているのですから、人間の乳児も母乳だけで2歳半まで育たないはずがありませ

ん。人の浅知恵で、とんでもない子育ての誤りを犯しているのが今のわが国の医者なのです。ここに医者に代わってくす師が登場して国民を守らなければならない理由があります。

第2症例

神奈川県在住、5歳2ヶ月の男児。生後5ヶ月から瓶詰めの離乳食を与えられ、7ヶ月から保育園で固形物を丸呑みして育てられた子です。ここに母親の手記を記します。

私の息子は現在5歳になります。3歳ごろからけいれん発作を1日8~10回程起こし、あちこちの病院を駆け巡りましたが、症状はよくなれるどころかますます悪くなり、息子は多動になって意味もなく動き回り、まるで夢遊病者のようで、私どものことばも聞き入れることもできない子どもになってしまったのです。

受診した県立小児センターの先生は、5歳の長男の知能指数は3歳程度で、これからも多分伸びることは期待できないので、「普通学級には行けないでしょう。今から障害者としての道を歩むことを考えてください」と言われ、私達夫婦は立ち上がりがれいほどのショックを受けました。

しかし長男には、最低限自分のことは自分でできるようにしてやりたいと思い、真剣に子どもの知能を伸ばすことを考え初めて、いろいろ探しているときに「家庭保育園」に出会い、

西原先生の指導には、正直言って本当にこれで大丈夫なのかと思い、今まで通っていた小児センターの先生に相談に行きました。

すると、小児センターの先生は「そんなバカな話は聞いたことがない。現代医学の文献の中には、そんな記述は一切載っていないし、とんでもないことだ。薬を飲ませないと発作はもっとひどくなり、廢人になっても責任は負えませんよ」と一笑にふされてしまったのです。

正直言って、西原先生の説を選ぶべきか、小児センターの先生の説を選ぶべきかとずいぶん迷いました。また、保育園に西原先生の診断書を出したところ、「成長期の子どもの食事からタンパク質を除去してしまったら、この子は何を食べて生活するのですか？ こんな無謀な診断書は見たことがない。動物性タンパク質を今の1/3～1/2に減らす程度なら受け入れてもいいですが」とのことでしたので、西原先生には内緒で少しタンパク質を取り入れることで息子は引き続き保育園のお世話になっていました。

しかし、よく考えてみると、2年間も薬を飲み続けているのに、発作はよくなっていますんでしたので、思い切って西原先生の言われるよう薬をやめる決心をしました。そして恐る恐る薬をやめてみたところ、発作が以前と比べて増えるわけでもなく、むしろ薬をやめたころから子どもの激しい多動が徐々におさまってきて、ずいぶん落ち着いた行動がとれるようになりました、私どもの言っていることも素直に聞けるようになったのには、とても驚きました。

薬もやめ、家では一切タンパク質を除きましたら、発作の回数もかなり減ってきました。それでも1日3～4回は発作を起こしていたので、担当カウンセラーの方に相談してみたところ、原因を探すために食事日誌をつけるように勧められたのです。早速日誌をつけてみましたが、保育園で少量のお豆腐、納豆、シラス、ししゃも、卵、魚などを食べた後に発作が起こることがわかつてきたのです。

赤ちゃんのころ、離乳食として体のためによいと思って与えていたものすべてが、発作の原因になっていることがわかりました。それでも、保育園ではどうしてもすべてのタンパク質をやめさせてくれないので、再びカウンセラーの方に相談しましたら、今までとは違った厳しい声で、「お母さん、お弁当に切り替えなさい。お子さんの命はお母さんしか守ってあげられないですよ！」と言い、動物性タンパク質抜きでもおいしい献立のできるお料理方法を教えてくださいました。このカウンセラーの方は、ときどき電話をくださり、落ち込みそうになる私をいつも励ましてくださって、とても感謝しています。そしてそれ以来、お弁当を持たせるよう保育園に交渉し、今も実行しています。

また、西原先生のお話によりますと、発作は酸欠の状態のときに起きやすいとのことでした。そして細胞呼吸のミトコンドリアの呼吸タンパク質とヘモグロビンを励起させる太陽光線治療を勧められたのすぐに光健燈を購入して毎日実施しました。また、息子はアデノイドが腫れて舌癪着症も重症なため、ほとんど気道がふさがっているので、酸素の取り入れやすい気道を確保するため、舌癪着症の手術も勧められましたので、平成13年の12月に受けました。

西原先生のおっしゃることは、初めて聞くことばかりでしたので不安もありましたが、「これしかないんだ」との信念で、1つ1つ実行していました。去年の10月に初診を受けてまだ4ヵ月程度しかたっていませんが、1日10回以上も起きていた発作が今では全然起きなくなってきたのは、本当に嬉しいことです。また、薬をやめてからあの夢遊病者のようなわけのわからない動きもすっかりなくなり、落ち着きのある息子に戻ることができました。顔つきもすっかり変わり、姑も息子の顔を見るたびに喜んでくれるようになり、やっとわが家に笑顔が戻ってきたのです。

2年間の発作で親子ともに苦しんだことがま

るでウソのようで、西原先生と先生を紹介してくださった「家庭保育園」には感謝の気持ちでいっぱいです。

子どもが喜んで食べるからといって、腸が未熟なうちからタンパク質を与えると、恐ろしい食物アナフィラキシーを起こすということを、息子の発作を通して学ぶことができました。発作が起らなくなりますと、主人や姑が「タンパク質を与えないとい、子どもの発育に悪い影響が出るのではないか」と言いますので、ほんの少し白身魚を食べさせたことがあります。すると、翌日久しぶりにひどい発作を起こしてしまいました。

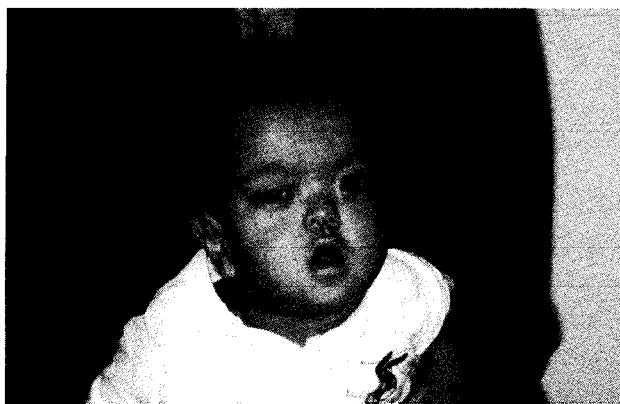
赤ちゃんのころに与える離乳食の恐ろしさを伝えてくださる西原先生が「家庭保育園」の顧問医師になられたことは、本当に心強く素晴らしい尊いことだと思います。私のような無知な母親で、子どもにはかわいそうなことをしてしまいました。私のようなことを二度と起こさないように、日本全国のお父さん、お母さんに、声を大にして伝えていってほしいと思います。

この1例でわが国的小児科医学が完璧に壊れてしまっていることが解ります。母乳にはタンパク質はカゼインとインムノグロブリンAしか入っていません。そして動物の細胞と植物の細胞の違いすら日本の医学関係者は知らないのです。両者の違いはセルロースの壁があるかない

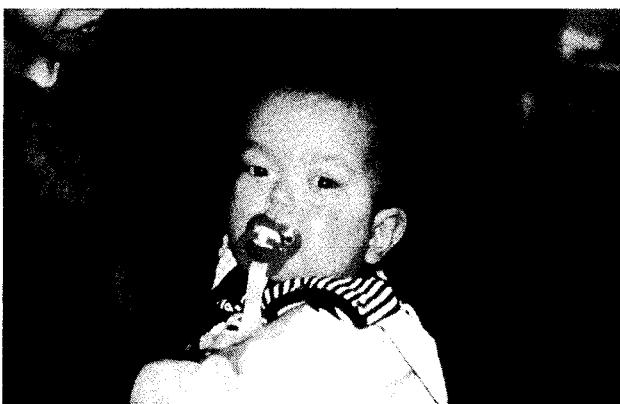
かだけの違いしかありません。ほかにはミトコンドリアの代わりにクロロプラストがあるだけの違いです。したがって動物性でも植物性でもタンパク質は同じなのです。ただ哺乳動物のタンパク質には主要組織適合抗原があり植物のものにはありません。したがって細胞レベルで再消化しないとうまくリモデリングに使えないのが動物タンパク質です。それで白血球がよけいに疲れるから、哺乳動物の肉（タンパク質）を食べると植物性のそれと比べて免疫力が低下するのです。

第3症例

1歳の男児（図2）で、乳児の時に横向きで寝かされていたために、頭の格好が分厚い辞書のようになってしまっています。そして完璧な口呼吸で酸素不足の顔をしていました。口は鼻よりも広いから、さぞかたくさん呼吸ができるだろうと思うのは大間違いです。鼻は呼吸粘膜でできていますから、酸素が吸収され空気も浄化され加湿されます。一方、口呼吸では扁桃組織のM細胞からバクテリアが体内に入ってきます。口をおしゃぶりで塞いで1ヵ月もすると、顔つきまで変わってきました。口呼吸で酸素不足の時は髪の毛がほやほやっと立っていましたが、鼻呼吸に矯正してわずか1ヵ月で、髪の毛が真っ黒になってねてきました。このくらいに鼻呼吸は重要なのです。機能的におしゃぶりの重要性を明らかにしたのは、約30年前の



A. 初診時



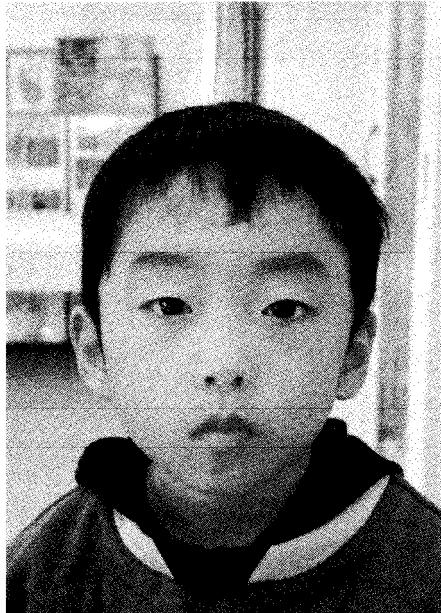
B. 1ヵ月後

図2 おしゃぶりの効用

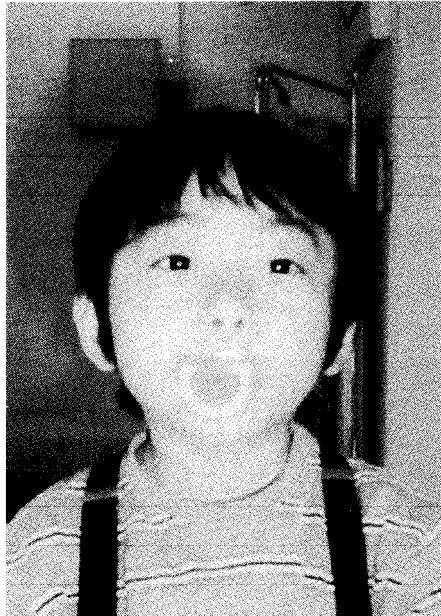
ドイツです。これをアメリカが百パーセント導入して4~5歳迄使わせると顎と鼻が見事に発達します。今の日本のやり方（1歳で取り上げる）はアメリカの60年前の誤りを忠実に踏襲するものです。

第4症例

喘息とてんかんの病名で筆者の研究所を受診



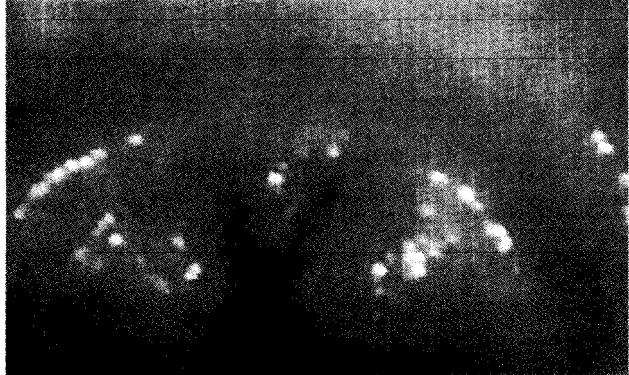
A. 初診時



B. 3カ月後

- A : 抗けいれん剤の影響で生気が感じられない。
B : しばしば起こしていたけいれん発作と喘息発作は
初診以後1度も起こしていない。

した4歳9ヶ月の男児です。2歳4ヶ月からてんかん様の発作を過去10回起こしていました。けいれんにはデパケンとテグレートルを服用し、鼻炎と喘息にはアルミジンとシングレアを服用していました。母親は離乳食は1歳半まで与えなかったと言い張っていましたが、おばあちゃんがついてきていましたので、聞きますと



2001年11月22日



2001年12月6日



2002年1月10日

C.

- 上：初診時
中：おしゃぶり使用して2週間後
下：6週間後、口蓋扁桃が著明に縮小している。

図3 喘息とてんかん

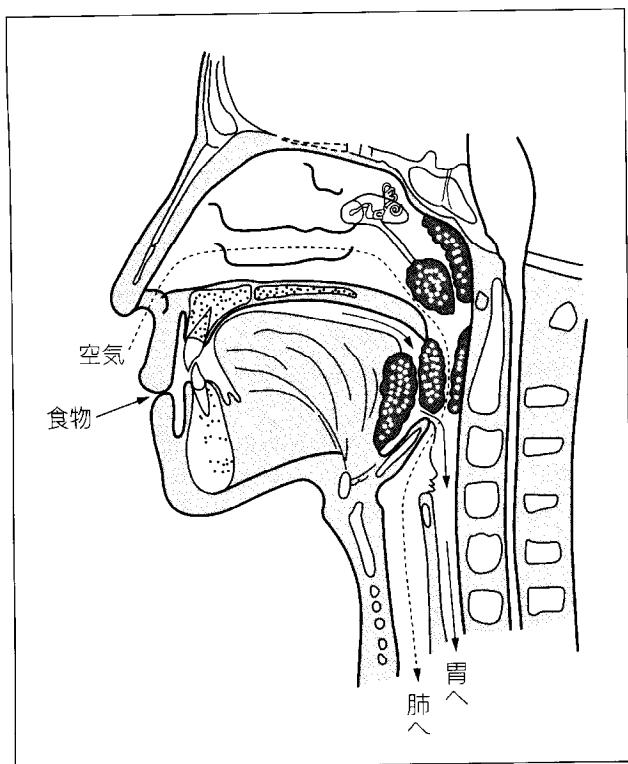
8カ月頃からいろいろなものを与えていました。1歳過ぎから、お寿司の甘エビをちぎって与えると、つるつる丸呑みするので、面白がって与えていたそうです。「エビはそのまま緑便とともにに出るでしょう?」と聞くとそうだと言います。そして3歳頃からエビせんべいや帆立貝、肉を食べても口から泡をふいてけいれんを起こすようになったのです。小児科では脳波をとっても異常波形が出るのでてんかんとして抗けいれん剤を1年間も飲んでいました。本人は典型的な口呼吸の喘息患者で、のどがひどく腫れていきました(図3)。おしゃぶり(8カ月用のビジョン社製一筆者の開発)を与えた、「これで治るんだ」と言って以後はなさなくなりました。

そしてそれ以後は喘息発作は風邪を引いても二度と起こさなくなりました。^{ひとごと}毎日にのどの腫れも縮小してきました。帆立貝を食べると、アナフィラキシーになる前に嘔吐してますから大

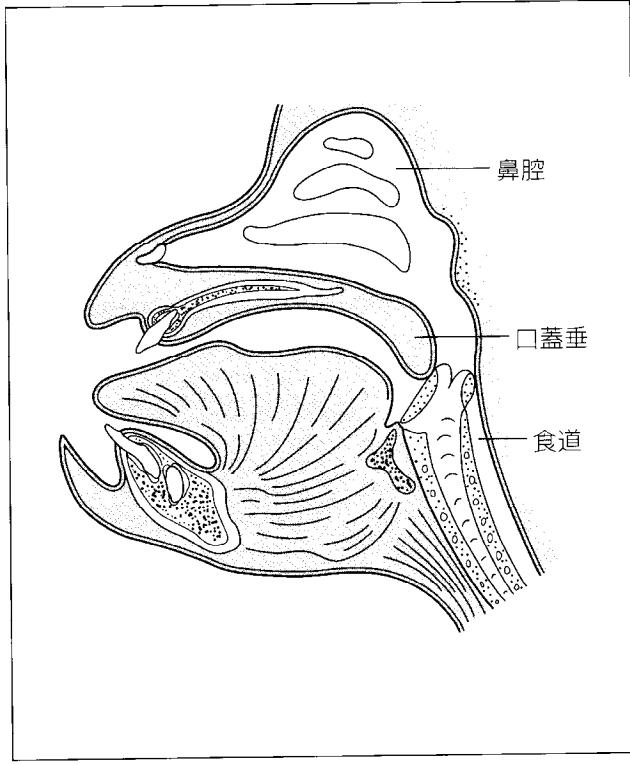
事には至っていなかったようです。キチン系骨格の食べ物と魚の干物、イカ、タコ、カニ、エビ、貝類、肉類を与えぬように注意したところてんかん発作も喘息発作も全く起らなくなりました。

母乳でアトピーになる子がいますが、母親が冷たいものを飲むと、腸から抗原性のあるものやばい菌が吸収されて悪いおちちが出るためです。赤ちゃんと大人の腸の性質さえ知つていれば、離乳食アレルギーは医者ではなくても誰にでも治せます。薬局で相談を受けたら、ぜひとも赤ちゃんのアトピー・アナフィラキシーは治してください。必ず治ります。母乳か乳児用のミルクを2歳半まで与えれば、誰にでも小ぶりでピカピカで頭の良い子を育て上げることができます。

口で呼吸できるのは哺乳動物では1歳以後の人類だけです。ヒトとサルの喉は著しく異なり



A.



B.

図4 ヒトの気道(A)と日本猿の気道(B)

A: 食物の道と空気の道の交叉。言語を習得した結果生じた人種特有の構造的欠陥(西原原図)

B: 喉頭蓋が前後に2つあり、気管と後鼻孔が軟口蓋で連続している(西原原図)。ヒトの乳児もサルと同様に鼻腔と気道が連続していて、吸啜しながら呼吸することが出来るようになっている。

ます（図4 A, B）。これは、人類が600万年から400万年前に言葉を習得したために生じた人体における最も具合の悪い構造欠陥です。口呼吸で人類特有の免疫病になるのです。口呼吸は外呼吸の誤りにより内呼吸すなわちミトコンドリアの酸化的リン酸化（TCAサイクルの回転によるエネルギー代謝）の障害に直結します。これに腸を冷やす冷たい物中毒と骨休め不足（寝不足による重力作用の過剰）というエネルギー摂取の誤りが重なると、慢性疲労から老化が進行し、免疫病を経て死出の旅路に結びつくのです。これが過労です。

哺乳動物の授乳期間は、種によって一定して

います。ヒトでは2歳半迄です。それまでは腸が未完成であるため、大人の栄養であるタンパク質がポイズン（毒）となります。したがってこの30年間に作られた離乳食なる代物は赤ちゃんに与えてはならないものだったのです。このアメリカの良識ある医者の常識を日本の医学者と厚生労働省の国民の健康を守るはずの官僚が知らないのです。これさえ知っていれば、医者ではなくても赤ちゃんを正しく育てる指導ができるのです。今や医者・医学者に代わって薬学・薬剤の先生に直接国民の身体を守ってもらうしかありません。